



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	「子どものデザイン」の原理と実践：我国における子どものためのデザイン教育の変遷から展望へ(審査結果の要旨)
Author(s)	大泉,義一
Citation	
Issue Date	2014-03-14
URL	http://hdl.handle.net/2309/137750
Publisher	
Rights	

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

美術科教育学の研究において、デザイン教育を対象とした歴史研究は存在するが、デザイン教育の変遷の中から、デザイン教育の目的に関する論点を取り出し、それによってデザイン教育の歴史的变化を整理し直し、さらに、デザイン教育の現状及び今後の方向性を提示することを目的とした点で、この研究は今後の図画工作・美術教育の方向付けにとって大きな意義をもち、きわめて独創性のある研究である。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

この研究において、三つの方法が用いられている。

第一に、研究史を踏まえた歴史研究である。日本におけるデザイン教育の歴史について、第二次世界大戦から現代に至るまで適切な時代区分を行い、その時代時代を画する論争あるいは資料を取り上げ、巨視と微視の両面から、デザイン教育の方向性に関する議論を取り出している。

第二に、この歴史研究から、現状及び今後の方向性にとって重要な概念を導き出し、それらの概念について、人文・社会諸学の研究の成果を用いて、理論的な考察を行い、本研究の学問的水準を確かなものにしていく。

第三に、第二の研究で獲得された概念を用いて、教育実践のためのマトリックスを作成し、教育現場での実践と検証を可能にしている。この研究では、マトリックスに基づく二つの教育実践について、具体的な実践内容と検証が提供されており、本研究の有効性・妥当性を継続的に検証、革新していくことが可能なよう配慮されている。

以上、美術科教育学の研究において用いられる、歴史研究、理論研究、実践研究が有機的に組み合わせられて、高い水準を達成している。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

日本のデザイン教育の歴史における基本的な資料及び文献を批判的に活用しており適切である。とりわけ、歴史研究の部分においては、小学校において保管されていた未公開の資料を発掘し、詳細に分析することで、その時代のデザイン教育に関する議論と教育現場での実践がいかに結び付いていたのか、デザイン教育がいかなる方向性のもとで模索されていたのかを明示している。また、造形教育センターにおいて公刊予定であったものの未完に終わった未公開の資料を発掘し、紹介したのも、当時の議論を浮き彫りにしており、貴重である。

新たなデザイン概念の規定、「子どもがデザインする」を評価するための概念の設定においても、妥当な理論的文献を用いた考察がなされており適切である。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究は、日本のデザイン教育の歴史を、第二次世界大戦から現代まで辿っているが、適切な時代区分によって、デザイン教育の理念の変化が照射されている。本研究は「子どものためのデザイン」と「子どもがデザインする」の二つの理念の力動によって、デザイン教育の変化を分析

しているが、これは、デザイン教育にとどまらず、図画工作科教育・美術科教育における積年の論争・変化をも浮き彫りにするものであって、考察の妥当性を示している。

本研究は、「子どもがデザインする」という理念を教育実践可能な具体的内容へと転化するために、歴史研究と現状分析からいくつかの指標を取り出し、人文・社会諸学の研究をもとにして、図画工作科・美術科教育において実践可能な理論的概念へと鍛え上げている。この理論的概念は、子どもの発達段階と組み合わせられることで、教育実践を具体化し、評価することの可能なマトリックスとなっている。このマトリックスに基づき実践的教材の開発が促進され、厳密な検証も可能になる。

以上、本研究は、学術的な手順を踏みつつ、今後の教育実践に大きな貢献をするものであって、学術的な水準を十分達成している。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究は第一義的にはデザイン教育の研究であるが、その射程は、図画工作科教育・美術科教育において、子どもの生活と結び付いた動機付けによって、絵画、彫刻、デザイン、工芸に通底する子どもの造形活動を育成していくこと全般に及び、博士（教育学）の論文にふさわしい深度を有する。

マトリックスの作成は、教育実践に有効であるとともに、今後の研究による批判・検証・革新を促進するものであり、教育実践同様、図画工作科・美術科教育の発展にとって、きわめて意義深い試みである。

以上の理由から、審査委員は全員一致して、本研究が博士（教育学）の論文として評価できるとの結論に至った。